

投句欄 自由律の泉 ⑱

- |    |                        |          |
|----|------------------------|----------|
| 1  | 盛夏ゆるめば秋の虫              | アカホリ フキ  |
| 2  | つもる話がつもりっぱなしになっている     | 久光 良一    |
| 3  | 懐かしいよりもニガイ思い出ふきのとう     | 木村 浩     |
| 4  | 隙間風届く喪中葉書              | 野谷 真治    |
| 5  | ひとり賄い 心美味しくあればいい       | 植田 博     |
| 6  | 疲れる人にうばわれる             | 無 一      |
| 7  | 老兵惨戦を語る飢えを語りダモイ        | 小山 榮康    |
| 8  | 白日夢 戦場に向かう恋人にキス        | 金澤 ひろあき  |
| 9  | よく見る夢を見る               | 行方 ほいさつき |
| 10 | 白芙蓉散り初めて引越し            | 大岳 次郎    |
| 11 | おはよう露の臺きようは大寒ですよ       | 増田 壽恵子   |
| 12 | 我慢の磁石になって生きる幸せ         | 竹内 朋子    |
| 13 | いつも妻の「だいじょうぶ」長く患う背に    | 見崎 厚志    |
| 14 | ボーダレス答えは一つでなくていい       | 原 さつき    |
| 15 | 満天の星低くふる里への扉開き         | 山本 説子    |
| 16 | 父、母へ日常の話して墓の前          | 黒瀬 文子    |
| 17 | いっぱい笑った今日自転車は月の光を浴びていた | 井尾 良子    |
| 18 | 立春大吉きのうの遺書を書き換える       | 平岡 久美子   |
| 19 | ままごとの夫婦のようなメジロを金婚夫婦    | 伊藤 哲英    |
| 20 | 機嫌のいい自分にあいさつする朝の鏡      | 部屋 慈音    |
| 21 | 執着も失せ払えばはらり落ちる雪        | 佐瀬 風井梧   |
| 22 | 春を待つ花とならんで日向ぼっこ        | 荻島 架人    |

- 23 厳しい寒さでもないが大寒の水を汲む ちば つゆこ
- 24 モニターに呟く医師の若い背中 富永 鳩山
- 25 ちさい靴初詣 田中 直心
- 26 登坂わずかも 膝のなきごと 檜 幽可
- 27 平和の為の兵器という救いようのないセンス 富永 順子
- 28 ノートの表紙キリンのまつ毛だ 篠原 紀子
- 29 すまして頬張るふ菓子角つちよ 佐川 智英実
- 30 ふきのとうからキミへの愛が天ぷら 大迫 秀雪
- 31 寒む寒む袖を袖に入れ庭は草萌ゆ 湯原 柳泉洞
- 32 キヤプテンだろう息白くひとときわ さいとう こう
- 33 喋ったら終りの酒流し込む 平林 吉明

## ● 泉 ⑰より 一句鑑賞

退屈がこんなに伸びた爪をきる

久光 良一

▼初心者でむずかしい事は分かりませんが、うちの家では一月七日に爪を切っています。その事を思いだしていました。良く分かる感じで選ばせていただきました。

(木村 浩)

▼退屈と伸びた爪―、相反する言葉が背景にある生活をおわせている。時間を持て余しているのか、退屈を楽しんでいるのか、その曖昧なところがいい。

(原 さつき)

▼退屈が爪を伸ばすのか、はたまた退屈が爪を切るのか、その両方なのか。退屈とは自分自身なのか、それとも自分の外にあるのか。さまざまな側面から自分を見つめている冷めたような目線に魅力を感じました。

(篠原 紀子)

亡き妻がビデオの中で生きてて寂しい

小山 榮康

▼ありのままを描いたこの句が、心の中にしみとおってくる。生きていく中で避けられないさびしさを、筆者と共有したような心持ちになった。

(金澤 ひろあき)

▼そうですね。お気持ちよく分かります。夫を亡くし随分経ち少しづつ癒されておりますが、今でも寂しくなったり、会いたくなります。

(山本 説子)

涼風にのる親子の会話にのってみる

竹内 朋子

▼あなたのお子さんも遠方にいらっしやるので会話はお電話でしょうね。秋風を感じる爽やかで、とても楽しいものだったのでしよう。羨ましい限りです。

(増田 壽恵子)

来秋は花に会えるかな

彼岸花の葉は茂る

増田 壽恵子

▼今秋は何の心配もなく、赤く鮮やかな花を見たいものです。心から祖先に会える年にしたいものですね。

(田中 直心)

梅もサクラも新緑も戦争がやってくる

富永 鳩山

▼梅 桜 新緑は人の平和の象徴、それらを一気に失うであろう最もおろかな戦争。恐ろしい行為が近づいている怖さを感じる。人類への文学的警告だと思えます。

(部屋 慈音)

今朝も思いきり伸びができる幸せ

新山 賢治

▼屋根のある家に住み、温かい布団で寝られる幸せを噛みしめる毎日です。

(佐川 智英実)

本当の事知らないまま戦争が待っていた

金澤 ひろあき

▼私達が先の戦争が終ってからひたすら願ってきた平和がもろく崩れた。どうしてそうなったか？ 誰にも知らされていない。

(平岡 久美子)

雨止んだんだなあと冬の街

野谷 真治

▼作者の生活の様子が目に浮かぶようです。ほっとする街でのひと時

の感慨に共感できました。

(アカホリ フキ)

手を伸ばせば掴めそうな屋根の月

原 さつき

▼子供の頃、思い出せば、あまり意味もなく、屋根の上へ昇っていた。「屋根の月」というフレーズが魅力的なのです——。

(野谷 真治)

戦争がインターホンを押している

伊藤 哲英

▼渡辺白泉の有名な句を踏まえてるのが一見して分かるだけに、一層迫るものを感じます。39年前、トマホーク・ミサイル搭載艦寄港阻止横須賀現地闘争に参加したのが昨日のよう。今じゃ日本政府自ら注文しスタンバってる。

(行方はいさつき)

▼ぞっとする句です。

(無 一)

しぐれに濡れ喪中のハガキまた一枚

佐瀬 風井梧

▼過疎の集落に住む友が一人又一人と欠けていきます。今日も一人他界しました。太平洋戦争の惨戦や飢えを話す人は周りにはいない、孤老人を支えていることは句作りだけになっています。(小山 榮康)

▼喪中のハガキが濡れているのがいい。だから薄墨を使うのだから。

「また一枚」のことは、いかにも苦しい。悲しい。「また」という限りは、重なること。悲しみは重なれば、息が詰まる。「しぐれ」でなくても、悲しい。

(大岳 次郎)

▼私にも去年は本当に喪中はがきがたくさん届きました。この句の作者も「しぐれに濡れ」と悲しみをより強調していて身に染みます。

(ちば つゆこ)

▼十二月のはじめになると喪中を知らせるハガキが届きます。その数は年齢と共に増え、まるでしぐれに濡れるように自分の心まで悲しみ濡れてしまいます。事象と内面が一致していて読者の心に刺さります。

(平林 吉明)

### 雲にのる通路側でいつも見る夢

佐川 智英美

▼「孫悟空」「仙人」「ノンちゃん」のように雲に乗っての飛行は、夢飛行でしょうか。何か手に持っている物でも解れば別ですが、ここにある情報だけで夢判断と云う訳にもいきません。「いつも」と「夢」で読みとれることは、何か出逢いを待ち望んでいるのかも知れませんね。兎にも角にも何でも句に詠める技量には共感。(檜 幽可)

### 産まれてなにを掴む手の懸命

さいとう こう

▼私にも曾孫ができました。もうそんな歳になったということであ々複雑な気持ちもありますが、やはり可愛いものです。この頃はスマホのお蔭で顔やちよつとした動きがいつでも見られますので見飽きずに見ています。(久光 良一)

▼産まれたばかりの赤ちゃん。どんな未来が待っているのでしょうか。親達の幸せ感がほのぼのと伝わってきます。(見崎 厚志)

▼小さな小さな手をぎゅつと握って生まれてくる赤ちゃんの愛しさ、どうか未来が明るく平和であってほしいと願う。どんな未来をもつて生まれてきたのかと……手の懸命が利いていると思います。

(黒瀬 文子)

▼良いことのあまりないこの時代、生まれてきてくれてありがとう。どうかたくさんの幸せを両手いっぱい掴んで欲しい。(井尾 良子)

▼赤んぼが握り返すのは把握反射といい、原始反射の一つであるが、サルに進化した祖先が移動する母親につかまるために身につけたものだ。親子の絆をつかむため行動をしっかりと受け止めるのが親というものの。

(伊藤 哲英)

▼吾子句への挑戦。この手の懸命は存外に短い。その時は夜泣きの波が我が身を苦しめるが、これは一時のものでもある。あれほどに小さい手の懸命は本当に振り返れば一瞬で、愛おしいものだ。

(湯原 柳泉洞)

### ● 係より

次回も、皆様の作品一句と、今回の作品の感想をお寄せください。左記宛て、同封の投句用紙、またはメールにて。

△送り先▽〒193・0832 八王子市散田町2・58・4

平岡久美子

メール kumiko801@h-wing.net

△締め切り▽ 2023年5月15日

★「自由律の泉」にご投稿いただいた句や感想は、原則的に自由律俳句協会の公式ツイッターでも紹介させていただきます。ツイッターでの紹介を希望されない方は、投句の際にその旨をお知らせください(投句用紙にチェック欄があります)。